

連載⑤7 地域密着を進める  
**女子大学の人づくり**  
 宮城学院女子大学 深澤 昌夫  
 副学長

宮城学院女子大学は、学院創立140周年を迎える2026年4月、学部としては最も歴史のある学芸学部（1949年開設）と最も新しい現代ビジネス学部（2016年開設）の2学部で学科の改組・増設を行い、宮城学院の歴史に新たな一歩を刻む予定です。2026年4月開設予定の

英語文化コミュニケーション学科（仮称、設置構想中）は、明治19年（1886）の宮城女学校設立から昭和24年（1949）開設の学芸学部英文学科まで、連続と続く英語教育の歴史と伝統を受け継ぎながら、学びの中核に「コミュニケーション」とは何か？という問いを置き、カリキュラムを今日的に再編、アップデートした学科です。現代社会は、デジタル技術の進展とインターネットの広範な普及によって、個人と世界の距離はかつてないほど「近く」になりました。しかしその反面、現実世界における対人・対面・直接的なコミュニケーションは希薄になっていき、様々な理由から直接的なコミュニケーションを避ける傾向すらあります。また、「顔」の见えないコミュニケーションによるトラブルも日常的に多発、頻発しています。英語文化コミュニケーション学科（仮称）は、社会生活に必要な能力としてこれだけコミュニケーション能力が求められているにもかかわらず、必ずしもコミュニケーションが十全に機能しているとは言えない状況にあって、改めて「コミュニケーションと



# 宮城学院140周年 新たなチャレンジ

は何か？」を問い、「コミュニケーション」の概念を更新し、社会が必要としている知識とスキル、そして積極的に物事に関わろうとする姿勢を身につけ、広く社会の発展に寄与、貢献できる人材を育成します。一方、現代ビジネス学部では、既存の現代ビジネス学科から、特に観光分野の学びを充実・発展・独立させ、観光ビジネス学科を立ち上げる予定です（仮称、設置構想中）。

年に行くべき世界の52カ所の第2位に岩手県盛岡市を選出しました。また2024年の「52カ所」の第3位には山口県山口市が取り上げられました。今後、大都市圏から離れた地方でも期待できる産業分野は観光です。しかしながら、東北地方は観光開発、インバウンド振興で後れを取っています。地方が抱える大きな問題の一つに、観光面で企画・戦略・経営を担う人材が必ずしも十分でない、ということがあげられます。観光ビジネス学科（仮称）が目指しているのは、たんに観光業や旅館・宿泊・飲食業界への人材供給にとどまらず、私たちが暮らしている地域の歴

史的・文化的資源が持つている価値と可能性を掘り起こし、観光分野で新たなビジネス価値を創出・創造できる人材、そして今後人口減少が急速に進行するであろう、この東北地方の地域振興や観光振興に寄与、貢献しうる人材の育成です。これにより、現代ビジネス学部は、経済学や経営学を学ぶことのできる現代ビジネス学科と、総合的に観光学を学ぶことができる観光ビジネス学科（仮称）の2学科体制となり、現代ビジネス学部全体の学びはよりいっそう充実したものになります。

宮城学院女子大学は、女性の社会進出と社会的自立を支援し、エンパワーメントする高等教育機関として、これまでも、そしてこれからも、時代のニーズに応え、大学改革をはじめとするさまざまな取り組みを推進していきます。深澤 昌夫（ふかさわ ますお）1963年生まれ、盛岡一高から東北大学へ進学、同大学院博士課程後期中退、八戸高専を経て現職。専門は江戸時代の文学と芸能。1998年「近松の研究」で歌舞伎学会奨励賞受賞、日本文学部長・図書館長・大宮学院研究科長等を歴任。現在、宮城学院理事、評議員、副学長を務める。学芸学部日本文学科教授。